
今日も彼女は吐き捨てる

本田サイモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も彼女は吐き捨てる

【NNコード】

N9759Y

【作者名】

本田サイモン

【あらすじ】

いかれた領主とその領主を取り巻く人形の世話をしなければならなくなつた主人公の話。

01 一度死ねば一度は死ねない

「手紙が来た」

村長の呼び出しに応じ、村中の人間が村の中央に集まっていた。甘い香りがするその手紙が来るということは、ほとんど計報の知らせと変わらない。

それはこの村の誰しもが思っている。

アニーは横目でブノワ夫妻の顔色を窺う。

蒼白とした顔色でその手紙を呆然と見ている夫妻は今にも崩れ落ちそうな雰囲気だった。

「 また、選ばねば」

重苦しく響く村長の声に皆、沈黙で答える。

……あのイカレ領主が。

アニーは胸中で毒づいた。

この村の領主は、この辺り一帯を治めている国王の弟だ。

なぜそのような高貴な立場の者がこんな辺境に追いやられたのか。

それはその容貌があまりに醜く、その見目に比例するかのように性格が歪んでいたからに他ならない。

王弟を持て余した国王は、この辺境に弟の領地を与えた國を追い出した。

その全てが歪な領主は、不定期な期間ごとに小間使いを必要とする旨を書いた手紙を、村長に送つてくる。

小間使いと言えば聞こえが良いが、領主の下へ行き無事に帰つてきしたものなど誰も居やしない。

ある者は精神を患い、ある者は帰つて来た途端に自殺を図り、またある者は領主の城から帰つてくることさえ無かつた。

そして前回領主の小間使いとして選ばれた人はブノワ夫妻の息子だつた。

彼は、帰つて来なかつた。

村を逃げ出そうとした者も大勢居たのだが、それらは決まつて剣で串刺しにされ死体となつて帰つてきた。

王は厄介者の弟をこの村に、いやこの村」と捨てたのだ。

「若いもんをこれ以上、死なせたくないが…」

村長がしわがれた声で零す。

「本当なら、先に死ぬのは年寄りと相場が決まつとのこいつ」

「ワシがなんとか話しを付けに行こうか」

「おやめなさいな。そんな事をしても死人が増えるだけだ」

領主は小間使いの年齢を13～40までと定めている。

いつも苦しそうに若者を送り出す「老人達が、アニーには逆に痛ましかつた。

「今日は私が行くよ」

アニーはさもまたここに帰つてこれるかのようない回しを、選ぶ。父と母がなにか叫んでいるが、それはアニーの脳に到達することなく流れていった。

驚いた皆をなるべく視界に入れないようにしながら、少し離れた丘

に建つて いるクソみた いに 小奇麗な 領主の 屋敷を 睨み付 けた。

02 貴婦人ヅラが気に食わない

アニーは最低限必要な荷物をまとめた後、唇に赤い紅を引き、簡素だが相手に失礼にならない白いワンピースを着た。

まるで死に化粧だ。
厳しい門を通され、入つてすぐの所に人影があり思わずびくついてしまつた。

杖を付いた男がこちらへ近づいてくる。

「お前が新しい奴か。てっきりまた男が来ると思ったが」

薄暗い屋敷内の、天井まである窓から差し込む光が男を捕らえる。
鳥のくちばしの様な鼻。ついでのよう付いている小さな口。
ぎょろりと剥いた目は何を見ているのか分からぬ暗さがあり背筋
が寒くなる。

クセのあるこげ茶色の髪は手入れがされていない様子で、がさがさ
していた。

若くも無いが初老という年齢でも無さそうだ。容貌が容貌ゆえ、図
りかねた。

アニーは眉間に皺が寄りそうになるのを必死で堪えて、これから自
分の主人になるであろう男の目を真つ直ぐ見返す。

醜さゆえに國を追い出された輩だ。

もしその容姿に何かしら意見や不満など墨しようものならどんな仕
置きをされるか分かつたものではない。
来て一日目で死にたくなど無い。

「アニーと申します。これから使用人として誠心誠意、勤めさせて

頂きます

「誠意など塵程も期待しておらん。お前は労働を提供すれば良い」

返された言葉に内心で舌打ちをした。

それを悟られないようにアニーは、顔に無表情を貼り付ける。

領主が大声で誰かを呼ぶと、細かな装飾の施されたドレスを纏った貴婦人が奥から姿を現した。

ふわりと微笑んだその人は確かに絵になるような美しさだが、美しそぎてどこか空々しく、特に瞳などあまりにも綺麗すぎる飴色で、その完璧さがガラス玉のような印象を持たせる。

金の髪を後ろに束ね、しとやかに歩くさまはまさに貴族様そのものだが……。

こんな身分の高そうな女が、なぜ没落貴族もいい所の領主の傍に居るのか。

「わたくしはイライダ・ベクマン・シエルビナ。

イライダと呼んで頂いて結構よ。貴女の部屋に案内するから、付いていらっしゃいな」

アニーの返事も待たずに貴婦人は歩き出すので、慌てて後を追う。時間を置いて気付いたが、なぜ屋敷内だとこの間にイライダは田除け傘を差しているのだろうか。

時折遊んでいるかのように白く清楚な傘がくるくる回る。両隣に庭を挟んだ風通しの良い廊下を過ぎると、飾り気の無いドアが無機的に並んでいた。

出口手前から2番目がアニーに充てられた部屋のようだ、アニーより一足先に到着していたイライダがアニーを待つようにその扉の前で佇んでいた。

「ありがとうございます」

お礼を言つて部屋に入ると、予想していたよりも数段整つている部屋にアニーは混乱した。

物置のようなカビ臭い場所へ案内されるものとばかり思っていたのに、随分と待遇が良い。

それに対しても微妙な居た堪れなさを感じイライダの方を向き直す。だが向き直った直後、首元の服を掴まれ壁に押し付けられた。大きな音を立てて壁にぶち当たった背中は咽そうな痛みを訴えている。

アニーを押さえ付けながらイライダは、その美しい顔をぐしゃぐしゃに歪め今にもアニーを殺さんばかりに睨み付けていた。

「殺す。覚えておけ。『主人様に』不便な思いをさせたら殺す。危害を加えたら殺す。害意を少しでも持つていたら殺す。色目を使つたら殺す。てめえみたいなガキが、わたくしの『主人様に近づくこと自体が腹立たしいが、人間でなければ出来ない加減というものがあると』主人様が言うから生かして置く。だが殺す。お前が妙な動きを見せればすぐ殺す」

お分かり?と問われてなんとか「はい」と声を絞り出し、答えた。そこでようやく開放される。

痛みと吐き気が同時に襲つてくる感覚がまだ残つていて自然と涙が出てそうになる。

だがその涙を、口の中をめいいっぱい噛んでアニーは耐えた。じこで泣いてしまうのはあまりに惨めだ。

「さつさと動きなさいな。貴女の仕事はぼんやりしている事ではないでしょ?」

また先程のような柔らかな対応になるイライダ。

出てつて欲しいなら出て行くけど、と喉まで出掛けた言葉を飲み込む。

一日でも長くここに、私は居なければならない。

頭が狂つていてるというだけで領主も人間なのだ。いずれ寿命が来る。アニーは14。

40歳まで働けるとして、26年は稼げる。

いや稼がねばならない。

領主が死ねば生贊を差し出す必要性が無くなる。そうすれば、村人はもう何も恐れなくて良い。

早く死ね。

アニーは痛みが収まるのを待たず立ち上がる。

こいつも領主もさつさと死ね。

それまでせいぜい、私が面倒を見てやる。

だから早く死ね。

微笑を機械的に浮かべたままの貴婦人を視界の端に捕らえながら呪いのように繰り返す。

頭が沸騰していて、その時のアニーはイライダの言った「人間でなければ出来ない加減」という言葉の意味を深く考えなかつた。

03 爪を噛むのは危所でやれ

屋敷に来て3日目。

アニーの仕事は領主の食事を作ること、紅茶を淹れること、菓子を作ることなど、食べ物を中心としたものだった。

時々領主の、何に使うかすら分からぬ氣味の悪い機材にまみれた自室を掃除をやらされること意外はほぼ食事に関する仕事に偏っていた。

もつと過重な労働を強いられると覚悟していたアニーは肩透かしを食らった気分でそれらの仕事を淡々とこなし、密かに溜め息を吐いていた。

昼には休憩を貰っていて中途半端に疲れた体を休めるべく自室へ向かった。

扉を開け、中に入つてからベッドに見知らぬ女の子が身を縮めるようになつてゐるのに気付き、ぎょっとして数歩後ろへ下る。

「…ここは私の部屋なのですが、何か御用でしょうか

聞くと子供は俯いていた顔を上げてこちらを見返した。

腰まで届くストレートの髪は白とこより銀色で、瞳は鮮やかな金。青白い肌に目の下の濃いクマが不健康そうだが顔は綺麗過ぎるほど整っていた。

しかしあはりライダと同じく、整い過ぎていて逆に不自然な感じがする。

子供はアニーの質問に答える気が無いのか、押し黙つたままでいる。いくら見た目が小さな女の子とはいえ、この屋敷での領主に関係

のある者だ。

子ども扱いして機嫌を損ねるのも困るので、これ以上うかつに質問も出来ない。

「……お菓子」

下手をしたら聞き逃しそうな小声で子供は呟く。

アニーは内心づつそりしながら手に持っていた自分用の菓子を子供に渡す。

折角休憩用に作っておいたお菓子なのに文句を言つても始まらない。

しかし子供はそのお菓子を口に含むと、すぐに吐き出した。

あまりに唐突な出来事にアニーは無意識にうなり声を上げていた。

「味、しない」

そんなはず無いでしょ、とアニーは大声で怒鳴りそうになつた。何が悲しくて自分用の菓子に味を付け忘れたりするというのだ。それでなくとも砂糖を焼き菓子に加えた記憶はちゃんと有る。

「あなたは、味、分かる、味覚、舌」

「……どういった事を仰りたいのか分かりません。何も御用が無いのならお引取り下さい」

「あたし、それ、欲しい。くれ」

ふと疑念がよぎる。

喋り方がたどたどし過ぎやしないか。

体格差からして4・5歳ほど歳が離れていると目算していたがその年齢よりも下だとしても明らかに言葉が角張りすぎている。その違和感に気付いた瞬間、相手の左手にも気が付いた。

刃物を握っている。

いや、腕が刃物になつていてる。

先程の言葉の意味と、その腕の異様さを鑑みて嫌な汗がどつと噴き出す。

案の定相手はその刃物を頭上に振り下ろしてきた。

その一振りは咄嗟に避けられたものの、アニーよりも相手の動きの方が数段早くアニーは自分のものとは思えない無様な声を上げて逃げ惑つた。

「コゼット、来い」

その領主の声を合図に子供の動きが止まる。

少しの間逡巡していたがもう一度「コゼット」と大声で呼ばれ、強く爪を噛む仕草をし、いかにも惜しそうにしながら部屋を出て行った。

暫く経つて、怖いものが去つたと認識して、ようやくアニーの思考が動き出した。

しかしそれに伴ひうじょうもない吐き気が襲つてきて、部屋が汚れるのも構わず自分の中についた全てを吐き出した。

覚悟が出来ているなんて思っていた自分が愚かしい。

何も、全然、覚悟なんて出来ていなかつたことを吐き氣と恐怖で思は知らされる。

そしてこの屋敷は予測していたよりもずっと狂つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9759y/>

今日も彼女は吐き捨てる

2011年11月29日21時54分発行